会報第一号は昭和六十三年（一九八八年）三月二十九日発行

西江原史跡顕彰会報

第63号
令和3年4月5日

コロナの時代に新たな動きを

西江原史跡顕彰会会長
落合清三

コロナウイルスというこんな恐ろしい細菌が、いとも簡単に我々の生活の中に入り込み、仕事を奪い、社会経済生活を混乱させた上に、多くの人命を奪っていくとは信じられないことでした。しかも地球規模で瞬くうちに拡大していくエネルギーのすごい力に驚くばかりで何一つ有効な対策を打つこともできませんでした。

歴史の教科書の中で恐竜が一瞬にして滅び去っていく姿を見て、地球の地殻変動や科学技術の未発達によるものだと思っていましたが、科学技術が発達した現在においても、私たちは何一つ抵抗するすべを持ち合わせず右往左往するばかりでした。

西江原史跡顕彰会の年間行事も他の団体と同じように中止の連続となってしまいました。そこで総務のメンバーが中心になって、西江原史跡顕彰会のやるべき事業や行事は何をすればよいのかを再検討してみました。

創立以来三十四年が経過している伝統を持ち由緒ある会の運営をされていた先輩の皆様の足跡は素晴らしい業績でした。西江原の歴史読本や西江原史跡ガイドもしっかりと作られており、年間事業も地域の中に根差した企画書ができています。史跡の案内板や説明板を始め標注も沢山設置されています。（設置後二十年経過）

しかし、創立当初からあった熱い情熱が少し寂しくなっているように感じています。そこで、地元の成り立ちや歴史について、話ができたり、聞けたりする会を作っていきたいと「まほろば館」に相談してできたのが「西江原史跡顕彰会出前講座」でした。

九月・十月・十一月の三ヶ月間に一ヶ月一度の講座をお願いいたしました。

九月は令和三年大河ドラマ「青天を衝け」放映決定になっている日本資本主義の父渋沢栄一と井原について（講師　首藤ゆきえ氏）

十月は西江原の古墳について
井原市内には約百十三基発掘調査された古墳を中心にして古墳調査の面白さや苦しさについて説明されました。（講師　高田知樹氏）

十一月は西江原の文化財について西江原町にある正雲寺・法泉寺・永祥寺にある文化財について懇切丁寧にご説明を頂きました。（講師　柳沢綾子氏）

今年度は、「まほろば館」の先生方のご協力により何とか活動ができましたが、来年度は少し体制を変更して年間計画についても、ち密に企画するようにしたいと思っています。

ボランティアガイドの体制づくりについて史跡顕彰会の組織内に、ボランティアガイドの会を作るかそれとも別組織として体制づくりをするかは別として、そんな組織があるといいですね。歴史が好きな人、同じ趣味を持って勉強学習ができる、その知識を伝える楽しさがあり、人の輪がますます大きくなっていくボランティアガイドは地域の応援隊でもあります。みんなの力で西江原ボランティアガイドを作りましょう。

若き日の渋沢栄一

井原市教育委員会　文化財センター
研究員　首藤　ゆきえ

九月に「出前講座」で行われた「若き日の渋沢栄一」の講演内容を掲載します。

はじめに

渋沢栄一は、天保十一年（一八四〇）に武蔵国の豪農の家に生まれ、昭和六年（一九三一）に永眠するまで、実業家としてだけでなく、社会公共事業や教育、国際交流のために尽くした偉人である。実は若き日の渋沢栄一は井原市を訪れていた。今回は、井原を訪れた際の様子や、重要な任務であった農兵募集にかかわる出来事を紹介する。

一橋家家臣となった栄一

外国人を襲撃する計画を立てたことから身を隠す必要が生じた二十三歳の栄一は、一橋家家臣である平岡円四郎と知り合った縁で、元治元年（一八六四）に一橋家へ仕えることとなった。

翌慶応元年（一八六五）、領民からの農兵募集を建言し、「歩兵取立御用掛」を命じられ、備中・播磨・摂津・和泉の4国の領地を巡回した。これが成功すると「勘定組頭」を仰せ付けられ、殖産興業や藩札整理などのために再び領地をめぐった。

その後は、慶応二年（一八六六）に領主の一橋慶喜が長州征伐へ出征すると、栄一も従軍するなど、慶喜に認められるようになっていった。

一回目の備中巡行～農兵募集～

初めての栄一の来井は農兵募集のためで、慶応元年三月七日に西江原村の一橋代官所へ到着した。当初は応募が全くないため、人望ある阪谷朗廬と知り合い、若者とも打ち解け応じる者が出始めたという。当時、「渋沢篤太夫（栄一）が農兵募集に巡見するので、その目的をしっかりと弁えて対応するように」と述べた代官からの触書の筆写が残っている。

二回目の備中巡行～殖産興業～

募集した農兵を無事に京へ引率した栄一は、今度は殖産興業のために領地をめぐった。備中国では、鉄砲の火薬の材料の一つである硝石製造を目論んでいた。製造地は後月郡の北部を想定しており、後月郡南部から必要な材料である「木灰」を、一軒につき一～二升ずつ供出させる計画であった。

この時、木之子村庄屋は木灰を準備できないと考え、一橋代官所へ歎願したところ、「出役の渋沢篤太夫（栄一）へ直接歎願するように」と言われた。庄屋が栄一へ「色々と陳べ質問に答え、歎願したところ、ついに〝尤も（な言い分）だ〟と思ってくださった」という。しかしそれでは一橋家の改革が進まないため、さらに熟談して、表向きは木灰を収めたこととして、実際にはその購入代金を村々が負担することとなった。栄一は相手の主張を受け止めた上で、腹を割って話し、妥協点を見出すことが出来る人物であった。

三回目の備中巡行

慶応二年（一八六六）二月に、栄一は慶喜の側用人・黒川嘉兵衛、奉行・三輪彦之丞、右筆・柳下十介とともに、一橋代官所へ下ってきた。この巡行の主な目的は、篤行者の褒章であった。阪谷朗廬や朗廬の義父・山成直蔵など

がこれを受けている。あわせて役人達は朗廬の講義を受けた。このことが、同年六月に朗廬が禁裏御守衛総督として在京の慶喜に招聘され、拝謁するきっかけになったと思われる。

井原の人々の農兵体験

慶応元年三月～五月にかけて備中国一橋領（三万三千石余り）からの最終的な農兵人数は、二二六人となった。秋以降、追加の募集もみられた。

現井原市内からも多くの農兵が上京したが、あまり記録は残っていない。名前が判明するのが、後月郡では青野村の三村三郎、梶江村の山本讃四郎、西江原村の柏木交一、小田郡では岩倉村の高次、秀蔵、十蔵などである。

中には、病気になり帰郷した者もいれば、京の物価が高く給金の値上げを訴えた者もいる。歩兵（徒歩で戦闘する兵士）としての稽古に励みながらの京での暮らしは厳しかった。

歩兵の稽古は幕末まで続き、慶応四年（一八六八）正月に鳥羽伏見の戦いが起こった。歩兵は慶喜軍として戦った。慶喜軍が撤退すると、その後は朝廷に逆らった「賊軍」となる。多くの農兵は郷里へ立ち戻ったようだが、最後まで旧幕府軍へ加わり東北での戦闘に加わった者もいた。

おわりに

慶応元年二月から翌年二月にかけて、栄一は西国の一橋領を幾度も巡回し、備中国の一橋代官所を少なくとも三度訪れ、大きな成果を上げた。当地での体験を通じて栄一は、一橋家（慶喜）へ仕える思いをより強くしたことだろう。

領地には栄一と対面した人々が多く存在した。また農兵に応じた若者たちにとって、農兵体験はその後の人生に大きな影響を与えただろう。

小管城址の草刈り作業

十一月十五日（日）の肌寒い朝、賀山の小菅城址進入路付近から小菅城址までの間を軽快なエンジンの音を響かせながら作業をしました。

例年なら八月の与一まつりの前に草刈り作業は終了しているが新型コロナウイルスの為中止になり、草刈作業もそのままになっていました。

小管城址が広範囲な事と会員の減少などで時間がかかり大変な作業です。会員の方や賀山の方々には事前に小管城址駐車場付近を草刈りをしてくださり、有難うございました。

現在会員の減少傾向で、作業計画も、事業計画にも負担が掛かる様になり、今後は会員の募集に努力しなければと思います。

史跡、歴史的な事に興味が有る方は西江原史跡顕彰会に入会して活動をしませんか。

西江原史跡顕彰会による「出前教室」

例年、西江原小学校は、西江原ふるさと探検を実施していました。今年度はコロナ感染症感染拡大防止のため、中止しました。

現在四年生の、子供達が歴史について勉強している西江原の先人達の歴史のお話をして頂けませんかとの依頼が有り、十二月十日（木）行いました。

まず、落合清三氏が子供たちに話しかけました。

皆さん「生類憐みの令」をご存知ですか。この為に領地没収、切腹、お家断絶、など有りましたが、此の地域西江原には関係ないと、お思いでしょうが、関衆利は西江原藩（二万石）を与えられ、備中地方五ヵ町村、最初は、片島から西江原藩神戸、子孫は同藩主として存続した。その後、兄の森長直は、（備中西江原藩二代藩主）後播磨赤穂藩主となって転封した。その様な事から西江原にも、関わりがあり、関衆利は森長継の十二男で、津山藩断絶の一件に巻き込まれた人物である。寺戸に屋敷を構え、宝永三年（一七〇六）に亡くなられた。

次に猪原完治氏が

一橋代官所江原陣屋について話されました。

八代将軍徳川吉宗の時代四男宗忠が江戸城の中に一橋という橋が有りその近くに陣営を立て、一橋と名乗った、後に、家康公が御三家を和歌山、名古屋、水戸に賄い料（生活費）として十万石を渡した。江原陣営は文政十年（一八二七）備中の国後月郡井原芳井、小田郡、上房郡、高梁これら合わせて六十予州と言います。約三万三千石を与えられた。興譲館運動場の近くに陣屋を構えた。代官所、お白州（江戸時代の法廷）が有りました。（四十二年間、八人の代官が勤め）その中六代目の代官、友山勝治は十年間も長く勤め教育にも尽力した。そして西江原領内、寺戸村へ一橋藩立郷校設立のため嘉永四年（一八五一）桜渓塾を開いた。阪谷朗廬を招き、嘉永六年（一八五三）一校を設けた。翌年に興譲館と名づけられた。友山勝治らが中心となって、有志が立ち上がりこの地域に寺子屋以上の教育を実現するため興したのが興譲館、半官半民の私学としてその歴史を刻んだ。現在の興譲館高等学校です。

続いて法泉寺の先納いづみ様から

伊勢新九郎盛時（北条早雲）は、菩提寺である法泉寺で古痴仁泉和尚から学問を学びながら高越城から法泉寺までの、田んぼ道、山を越え往復しながら成長したとのお話がありました。